

課題の価値

京都新聞 論説委員

澤田亮英

課題のない都市はない。急いで解決すべきときもあれば、腰を据えて考えるべき状況もある。全てが都市にとってマイナスではなく、プラスに転じる課題もある。

京都の文化の一つである「景観」について考えてみたい。欧州の歴史都市に比べれば統一感の弱いビルや住宅が立ち並ぶのは否めないが、それでも、社寺や町家を基調に低層の街並みを保ち、看板も厳しく規制してきた。日本の大都市では希有な存在である。

景観が京都の文化として守られてきた一つの力は、市民を巻き込んだ論争ではなかったか。そのはしりは1960年代の京都タワー建設であり、90年代に開業した京都ホテルや京都駅ビルの計画には宗教界も含めて賛否が渦巻いた。

論争が起きた当時、それぞれの計画はネガティブな課題として捉えられていただろう。しかし、時間の経過とともに、これらの斬新な建築は街並みにとけ込んだ。数十年に1度の論争が、後世に新たな価値を残したとみることができる。

課題がプラスに転じた例だが、一方で別の課題がみえてくる。論争が起きた時間のサイクルを30年に1度と考えると、ちょうど今が、その時期に当たる。だが、新たな景観論争の兆しはない。それほど独創的な構想が見当たらないということでもある。

市民の間で対立もみられた、かつての論争がそのまま再燃すればよいとは思わないが、議論を通して「京都のあるべき景観とは」「どのような街並みを残すのか」を市民が自らの問題として考える機会がないのは、危機感を持つべき事態かもしれない。

観光客の急増による過剰な混雑は急いで解決すべき課題だが、国内外の人を引きつける景観の価値を持続させる上で、「論争なき景観」のままでよいのかは、腰を据えて考えるべきではないだろうか。

京都が比較的新しく獲得した価値に、「環境」がある。

1997年、地球温暖化防止京都会議(COP3)が開かれ、先進国に温室効果ガスの排出削減を義務付けた「京都議定書」が生まれたのが、きっかけとなった。

全国各地に環境問題に熱心な自治体はあり、京都が突出しているとはいえませんが、地名を冠した議定書のインパクトは大きかった。行政の仕掛けもあって、市民の間にごみの減量や分別、再利用といった活動が広まり、多様なかたちで定着していった。

家庭や事業所から出た天ぷら油を回収し、市バスやごみ収集車に使うバイオ燃料を精製するシステムを官民連携で築き上げたのは、象徴的な効果だろう。

対照的な例として思い返すのは、2003年に京都や滋賀、大阪で開かれた国際会議「世界水フォーラム」である。

当時の新聞報道を見返すと、ダム建設を巡る是非や水道事業への民間資本参入への賛否に焦点が当たり、閣僚宣言の文言にも影響したようだ。だが、分科会などでは「水と平和」「水と文化多様性」「水と都市」・・・と、実に多様なテーマで議論が行われていた。本質は、こちらにあったのではないか。

会議後、雨水利用の普及などで草の根の活動がみられたものの、COP3後の温暖化防止のように、多様な市民活動が広く定着するほどの変化はみられなかった。

蛇口をひねれば琵琶湖から送られた水が出て、豊かな地下水が京都の伝統文化と産業を支えている。それが当たり前で、それほど大きな課題はない—その感覚が原因だとすれば、私も全く偉そうなことは言えない。

景観問題のように都市の内側からわき起こる議論もあれば、環境問題のように外側からの刺激を受けて市民活動が生まれる例もある。内なる市民が持つ力と、外から訪れる人が加える力の双方が大きく、時代をこえて作用し続けてきたのが京都の特性ともいえる。

今回のプロジェクトで、「水」を手がかりに都市の文化を掘り下げる議論に耳を傾けながら、水と深くかかわる「森」に目を向けたいと考えていた。

かつて取材した京都の社寺、伝統行事では、資材の確保と維持するお金に苦労している話をよく聞いた。例えばお盆の送り火を営む五山の中には、松の中でもヤニを多く含んだ材が欠かせない山がある。しかし、人が入らなくなった近隣の里山は手入れが行き届かず、調達が難しくなっているという。知名度の高い行事ですら課題が多い現状は、小さな社寺や行事も深刻な問題に直面していることを意味する。

京都の伝統行事を支える森を守るため、官民連携の活動は進んでいる。ただ、それだけで、数十年、数百年先も行事が続くとは限らない。どうすれば京都の内と外の両面からもっと関心が高まり、持続できる力につなげていくのか。「みなさん、京都の里山に関心を持ちましょう」と呼びかけるだけで改善するはずもない。

ヒントとなるのは、梨木神社の染井から生まれたコーヒーのように、課題が転じて新たな価値を生む動きに、自然と人が集まり、輪が広がる仕掛けではないだろうか。

澤田 亮英(京都新聞社論説委員)

1997年京都新聞社入社。記者として京都、滋賀の政治・行政を計16年、宗教を3年担当した。北部総局(京都府福知山市)のデスクなどを経て、2023年10月から論説委員。

Epilogue

by Suzuki Takahisa

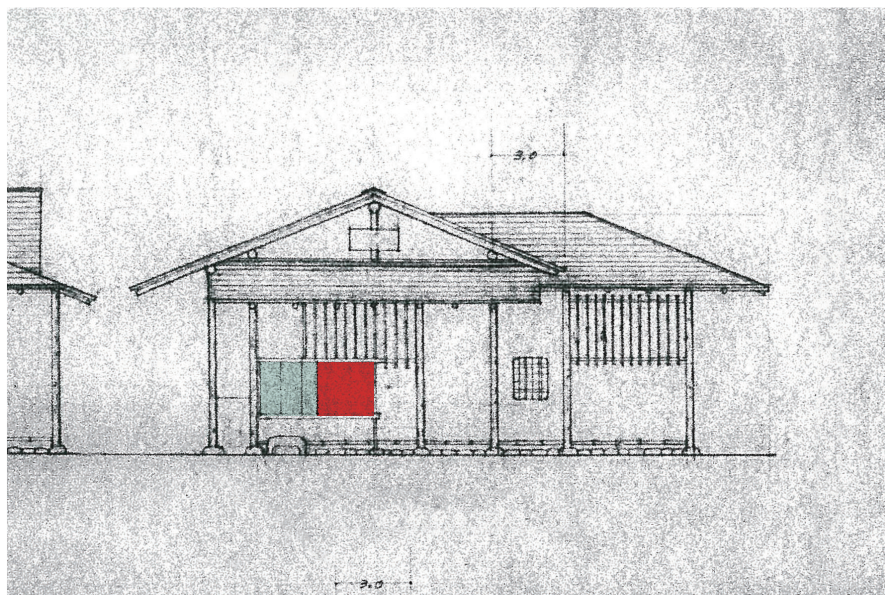
Roundtable Discussion

To Designing

About The Future

And Creativity

of Kyoto City



レポートのために起こしたマークは、Plot4のStructure Designの中でくる「ニジリグチコモンズ」を視覚化させようと試みた。躡口とは、縦2尺2寸、横2尺5分の入口の外側に縦2尺1寸8分、横が2尺3寸の引戸をつける茶室への出入口で、千利休が草庵茶室・待庵に設けた小さな入口がはじまりと言われている。頭を垂れて伏してにじりながらでないと入れない大きさで、武士の時代には刀を腰につけているとくぐれないので躡口の外に刀を置く場所があったとされている。頭を下げて茶室に入ることによって身分の差がなくなり、茶室の中では平等であり、人としてのコミュニケーションを紡ぐ場所として茶室があった。

そして今を生きる私たちにも、そのような時間が必要に思う。他者と理解を深め合い、共に生きる社会の先に豊かさがあることを望む。マークは、縦2尺1寸8分、横2尺3寸の図形を二つ並べ、水色と赤色にした。水色は濃度を薄くし「弱さ」を、赤色は「温度」を表現している。その二色が重なる境界が「Interface(界面)」である。今回のレポート作成も、たくさんの温かな手を借りて形となった。躡口をくぐって茶室へ入るように、相手のことを互いに気遣うことができれば、文化と経済を循環させる一歩目は、そんなに難しくないように私は思う。

16 design Institute(図録デザイン研究室)代表

鈴木孝尚

グラフィックデザイナー。1985年愛知県豊橋市生まれ。グラフィックデザインの領域から社会との関わりを考え、それを残すことを目的とし、人との縁を大切にしながら、少しでも後世に残すために活動。「清水寺」のブランディング事業や「山口ゆめ回廊博覧会2021」の映像制作。岡山県牛窓町にてharuka nakamura、牧野伊三夫と共に牛窓中学校の第二の校歌となる「牛窓のうた」を2024年4月に発表。